

『海を抱いて月に眠る』

2018年06月21日

「東京新聞」の「本音のコラム」欄に佐藤優氏が、深沢潮氏の『海を抱いて月に眠る』を激賞していたので早速読んだ。佐藤氏は「帯」に「感動で全身が震える傑作。国家と民族に翻弄される人々の中に愛のリアリティーがある」と書いていた。飾り気のない文章だが、惹き込まれて、一気に読んだ。そして、在日韓国人の友人から聞いたことや、韓国の民主化に関する諸々のことを、重ね合わせて想い起こした。在日の人々は戦後の日本で差別を受け苦勞したばかりでなく、故国が南北に分断され、韓国系の民団と北朝鮮系の総連に分かれて争い、また、軍事政権派のグループと民主化を求めるグループとの闘いがあった。彼らの苦惱は日本の植民地支配に遠因はあると、読みながら、改めて思った。

在日韓国人一世の本名・文徳充、通称名・文山徳充は一口大の餅菓子を喉に詰まらせ、90歳で、急死した。長男と長女の二人の子どもがいた。長男は韓国人であることを隠し、日本人になり切って生きていた。長女は梨愛と名付けられ、在日のアイデンティティを持ち続けた。在日はまず、日本社会で差別を受けるので、自分をどこに位置づけるかに苦悩する。徳充は気難しく、自分の思いを正直に表すことができず、家族にも親戚にも疎まれていた。通夜の時、泣きはらして、悲しむ美しい女性と「アイゴー」と棺にすがりついて泣く老人が現れる。梨愛は、見知らぬ人々が父の死を悼んでいる姿を見て、父はどのような人生を歩んできたのかと思った。書き遺したノートが見つかり、波乱に満ち、愛と情熱を持って生きた父の生涯を「わたし」という一人称で追想することになる。

韓国から小さな船に乗り、密航して、日本に向かう。嵐に遭遇し、一人の友を失うが、九死に一生を得て、日本に辿り着く。日本で、文徳充という他人の名をもらい、その名で生きていく。私の友人も密航して、日本に来た。日本の近くに来た時、スクリューにロープが絡み、動けなくなった。冷たい海に飛び込み、ナイフでロープを切って、日本に上陸したと聞いた。徳充は日本に来てから、友人などを頼って、生きていくが、その貧しさは半端ではない。政治学者の姜尚中氏もソフトバンクの孫正義氏も極貧を体験している。徳充は民団に所属し、同族のために活動する。私の在日二世の友人の父が亡くなり、私が祈っていた時、友人は父親の過酷な生涯を思い、ショックで床に倒れた。その後、民団と総連の人々が来て、自分たちが葬儀をすと言いつつ合っていた。南北の分断は在日も分断し、争ったのである。徳充は恋をして結婚するが、愛情表現が下手で、しっくりいかない。そして、長男を得るが、重い心臓病を持って生まれた。子どもの病を通して、父、母、子の愛情は深められる。大手術を受けたが、健康保険がなく、経済的に大きな負担を負う。しかし、命がけで密航した友人たちとの絆は深く、助けられる。パチンコ屋で儲けた徳充は、友人の家族に支援を惜しまない。通夜で、涙ながらに追悼したのは、その人々であった。

韓国は、李承晩政権が倒され、軍事クーデターによって朴正熙が大統領に就任する。民団は、朴軍事政権を支持するグループと民主化を求める反主流派に分かれ、激しい闘争を展開する。徳充は民主化を求めるグループに属し、活動する。民主化のシンボルで、来日していた金大中に遭い、感激し、金を支える運動にのめり込んでいく。韓国の民主化は、岩波の『世界』に連載されたTK生の『韓国からの通信』が大きな役割を果たした。後に、著者「TK生」は、感銘を持って講義を聴いた池明観先生であったと知って驚いた。

徳充は母が重篤であると聞き、民団からパスポートを出してもらうために、民主化闘争から手を引いて、故国の母を見舞う。彼自身も、故国の墓地に、子どもたちによって葬られる。在日のあらゆる苦惱を舐めながら愛を生きた生涯で、涙なしには読めなかった。